

赤いシールが貼られた羅漢

なりひらいちへいた
成平一平太

大岳病院には広大な敷地を囲むように桜が植えられている。その桜が、九年ぶりの大雪が降った一か月前の裏返しなのか、三月下旬にもかかわらず連日二十度を超える暖かさに揺さぶられるように一気に開花した。しかし、四百に近い病床に横たわる患者の多くは、淡いピンクの花びらを誇るかのようなソメイヨシノを楽しむことなどはない。いや、したくてもできないのだ。

足柄平野を縦断する酒匂川のほとりに建てられた大岳病院には、自力で病床から起き上がることできる患者などはない。したがって、入り口に掲げ

られた入院患者の名札の横には担送を示す赤いシールが全てに貼られている。

大きく口を開けたまま身じろぐこともなく横たわる老人。焦点の合わない視線は天井に穴でも空けるかのようにだ。空いた天井の向こうに、在りし日の自分の姿を探しているのかもしれない。枕元には『仰向、半右、右、仰向、半左、左、仰向』と書かれたカードが置かれている患者も多い。その日の担当介護士が三時間ごとに患者の床ずれを防ぐために体を動かす方向が書かれているのだ。

三〇四号室の露木育代は、嫁と戦っている夢を見ているのだろう。ぬか漬けの床のかき回しかたから始まって、味噌汁の作り方。筑前煮を作るのか里芋の皮むき、根菜の包丁の入れ方から砂糖や醤油の分量までこと細かい。はたまた洗濯や掃除の仕方にもで口うるさく注文を付けている。若い女の看護師や介護士などはカルチャーセンターに通うより解り易

く安上がりなどと軽口をたたいている。

鈴木育代だけが看護師の話題にあがるわけではない。病棟ごとの各階に同じようにその存在が知られている患者がいる。そんな患者以外にも、時々声をかけないと死んでいるのではないかと思うほどに静かに横たわる患者もいれば、意味不明の言葉を呪文のように口にしてる患者。必死に家族の名前を呼び何かを訴えようとする患者もいる。なぜこの病院のベッドに寝かされているのかなどと正確に理解できている患者などはいない。それでも、どの患者も顔色は病人のそれとは少し違う。決まった時間に最低必要なカロリーを接種しているからだ。もちろん自力で茶碗を手にとって箸を扱える患者など皆無だ。介護士によって口の中に流し込まれる患者は他の患者に比して健康な部類だ。その多くは点滴液を食事と称し、鼻から食道に管を通して流し込まれる。

大岳病院には、大型の医療設備は何もない。ある

のは旧式のレントゲンとこれまた中古のCTが備わっているだけで手術室もなければ治療室もない。あるのは小学校の保健室にも似た診察診療室があるだけだ。リハビリ室はあるが都合上設けられているだけで、ここを利用する体力も気力ない患者ばかりが入院しているのだ。

「私どもでは患者様が元気になられて退院されることを目的に治療をほどこすのではなく、患者様の健康管理をおこないながら安全な入院生活を過ごしてもらうべくお手伝いをさせていただいております」

大岳病院の事務担当者が、明日に入院を控えた家族に笑顔で語りかける。こうした入院における確認事項などを説明している光景は、毎日のように見られる。どの家族も口にこそ出さないもののこの大岳病院のベッドの上で生涯を終えることなど百も承知しているのだ。大きな病気を抱えていれば他の道もないではないが、一定の線を越えた老人になればだ

れもが寝たきりとなる。三か月ごとに病院をたらいまわしにされ、終の住処としてこの大岳病院に廻されてくるのだ。患者はそれぞれ多くの問題を抱えている。自宅療養ともなれば誰かが犠牲となり付き切りとなる。昼間だけではなく二十四時間家族として患者と向き合っていかなければならない。精神的負担は大きなストレスとなつて家族崩壊の起爆剤にさえなりうる。

大岳病院はそんな家族にとつての安全弁なのだ。もつともその安全弁を手に入れるにはそれなりの対価を必要とする。大学卒初任給をも上回る額が家族のもとに請求書という形で毎月送られてくる。

四百人近い入院患者の中には十五年を超える老人もいる。ごく普通のサラリーマンの手が届く一戸建て住宅なら二軒は購入できる金額をこの家族は負担してきたことになる。さらにその何倍もの金額が税金でまかなわれているのだ。

大岳病院のベッドが何日も空くことはない。入院待ちの患者が鈴なりになっているからだ。結果として毎月一億円近い金が患者の家族から大岳病院に入ってくることになる。医療保険に合わせ介護保険という名の税からの拠出分を合わせれば十億を軽く超える売り上げを大岳病院は計上することができる。

病院と介護施設の違いは、点滴を始めとし患者の体に直接何かを施す行為ができることだ。CVカテ―テルの挿入や定期的な血液検査、導尿行為をそして食事療法などがその代表的なものになる。

「伊藤泰造さん、お食事の時間ですよー」

正看護師の吉浜佳代子が慣れた手つきで点滴のバックをスタンドに掛ける。この患者に食事を取っている認識はない。生きている実感さえもおそらくはない。

毎朝八時にはナースセンターに入りきれないくらいの看護師や介護士が集結し引継ぎ事項を確認し、

その日の仕事がスタートする。佳代子も受け持ちの患者の一人一人に声をかけながら様態の確認を行う。その合間を縫うように介護士の手によって、おむつを替え、寝間着を替え、口腔清掃が手際よく進められる。

佳代子が所属する宮崎班は宮崎看護主任の他に十六人の正看護師と七人の看護師見習い。十五人の介護士がチームを組み、十五室四十三人の患者を三交代のシフトによって世話をしている。佳代子は東京の総合病院を辞めて大岳病院に移ってきた。この春で三年になろうとしている。

大岳病院には看護部長の下に八チームが生まれ四百人近い患者の世話をしていた。病院職員は他にもいる。理事長と十人の内科医師。医療検査科職員に事務職員。週に一度の入浴の世話をする職員。患者や病院職員の胃を賄う栄養部職員。営繕職員に警備職員。さらには清掃職員とほぼ患者の一・五倍ほど

の職員が毎日を回している。言い換えれば患者二人で三家族の生計を賄っていることになる。

「佳代子、夕べ亡くなった三〇七号室のベッドメイキング、お昼すぎまでお願いね」

夜勤と早番勤務との引継ぎミーティング時に宮崎看護主任から佳代子に指示がでた。大岳病院では患者が亡くなり一階の霊安室に移されると同時にそれまでの寝具はすべて取り除かれ消毒室へと運ばれる。むき出しになった鉄の骨組みだけのベットは、朝一番で次の患者を受け入れるために営繕係りの手で点検され消毒用アルコールによって隅々まで汚れとともに拭き取られる。四百以上もの病床があれば毎日繰り返される作業となる。そして空いたベッドに新たな患者が横たわるのに三日を要することはない。

「三〇一号室の安田トヨコさん今日で記録更新ね」
佳代子と同じチームの橋本美由紀がシーツのしわ

を伸ばしながら口にした。

「でもご家族は大変よ。長生きを喜んでばかりはいられないんじゃない」

佳代子がそれに応えた。

美由紀は大岳病院では佳代子の一年後輩にあたる。秋田の看護学校を卒業して横浜の総合病院に勤めていたが結婚を約束した相手が妻帯者だと知ってきつぱりと別れる決意をして大岳病院に移ってきた。今月でちょうど二年になる。佳代子も美由紀も今年の夏には二十八歳を迎える。

「そうよね。十六年目に突入だものね。十六年よ。

私はいやだわ」

「誰だってそうよ」

「でも五十年もしたらこのベッドに寝てたりして？」

「あなたたち、声大きいわよ」

廊下を歩いていて宮崎看護主任が病室に顔をのぞ

かせ二人を叱責した。佳代子と美由紀は動かしていた手を止め、つついおしゃべりが過ぎたと慌てて押し黙った。

ここに横たわっている患者のすべてに意識はある。反応ができないわけではない。当然人の会話も聞こえてはいる。ちぐはぐではあっても受け答えができる患者も大勢いる。宮崎看護主任は他の患者を気遣った。

佳代子と美由紀は、きれいに整ったベッドの枕元に新たな患者の名札を掛け、受け入れ態勢を整えた。

「ああ、いつまでこんな仕事を続けるのだろう」

美由紀が病室を出ると同時に大きなため息をついた。佳代子は美由紀の愚痴にも似たため息が気になった。

早番勤務は朝の七時から四時までが担当時間に当たる。一日のスケジュール表は個別に作られ十五分あまりの休憩も四十五分の昼食時も全員が同時にと

いうわけにはいかない。常にナースセンターに誰かが残り、空にはできない。さらに一時間おきに各病室を巡回し、患者の一人一人に声掛けをしなければならぬ。患者の死は突然やってくるからだ。

「どうかしたの美由紀。疲れているの？」

巡回日誌を書きながら佳代子が、薬剤チェックをしている美由紀に声をかけた。

「なんか違うような気がしてね」

美由紀は大岳病院に移ってきて仕事にも慣れてきたせいなのか、冷静に自分を見つめなおしてみると看護師としての職業を選択した時に描いていた世界と現実とのギャップの大きさに悩んでいると言葉を続けた。

「ねえ、美由紀。来週の休みの予定は？」

「彼氏いない歴三年。特になにもないわ」

「じゃあさ、箱根にいかない？」

しめしあわせて有給休暇を取らない限り、月に一

度くらいしか佳代子と美由紀との非番が重なることはない。佳代子はシフト表を確認し、美由紀をドライブに誘った。

「箱根？ いいけど」

佳代子にも特に心に決めた相手などはない。いや美由紀よりも彼氏いない歴は長い。美由紀は少なくともそう思っていた。二人とも美人とはいえないまでもスタイルもよく色白で間違ってもブスの部類ではない。なのになぜか彼氏ができないでいる。もつとも総合病院と違って患者数は多くても外来もなく、医師の数は極めて少ない。若い医師などは一人もいない。若い介護士は何人もいるがハードな仕事の上に給料が少ないと誰もが嘆いている。

「いつまで続けられるんだろう」

介護士たちの談笑室では毎日のように誰かが疲れた顔をして口になっている。男性看護師もいないではないがそれほど多くはない。いずれにしても友達

としてならばともかく、恋愛の対象者にはなりえないことだけは佳代子と美由紀の意見が一致していた。シフト制による独身者の休日の多くはウィークデイとなる。祝日と日曜日は家族持ちに優先的に割り当てられるからだ。

佳代子が運転する車は、一人住まいの美由紀のアパートを回って一時間ほどで長安寺に着いた。

「桜の季節なのに渋滞していなかったわね」

佳代子が山門の横に設けられた駐車場に車を止め、サイドブレーキを引きながら口にした。

「ねえここ、お寺さんよね？」

長安寺にも桜の樹が何本かは植えられている。が、まだ蕾は固い。駐車場の前には、池が造られていた。鯉が佳代子たちを歓迎してくれている。池の中の童子や亀のオブジェが水にぬれて独特の雰囲気を醸し出し、流れる水の音が静けさを演出している。

「佳代子、このお寺さん有名なの？」

十台ほどが止められる駐車場には佳代子の車以外には止まっていない。大きなお寺でもなければ、造りが変わっているわけでもない。多くの観光客が訪れるお寺とは美由紀には思えなかった。

「この長安寺は知る人ぞ知るよ」

「どういうこと」

美由紀も佳代子の後に続いて山門をくぐり本堂の前に立つと手を合わせた。

「美由紀、こつちよ」

佳代子は美由紀の手を引くように本堂に背を向けた。本堂の脇には小さな山の斜面を利用しながら庭園が広がっていた。いつの時代に造られたのか佳代子は知らない。雑木林を切り開いたかのように見える庭園には何百年もの時の流れを感じさせるものがあった。そこかしこに置かれた石仏が長大な時間の流れを語るかのようにさまざま表情を見せている。何体ほどの石仏があるのだろうと佳代子が初め

て長安寺を訪れた際に数えてみたことがあった。庭園の入り口には五百羅漢と刻まれた石碑が建っているが五百体もあるとは思えない。それでも視界に入っているだけでも三十体は超えているかのように見える。山の斜面には散歩道のように小さな小径が入り組んでいる。下からは見えなくても木立の脇に佇む小さな石仏。迷い人を包み込むかのように広げる両手。小さなことに気をもむなど言わんばかりに天を指さす石仏。一緒に泣いてやろうと涙を流しているかのような石仏。人の道を外すなど叱責してくれているかのような石仏。ひとつとして同じ表情の石仏はない。二十体ほどまで数えたところで佳代子は気づいた。この石仏たちのどれもが訪れる人の心の内を映し出しているのではないのかと。今日は微笑んでいる石仏も訪れる人の精神状態によっては違う表情にも見えるのではないだろうか。石仏の実数はその何倍にも膨らむことになる。五百と刻まれた石

碑は、その数を誇って刻まれているのではなく、何かを諭してくれているのかもしれない。石仏に対する敬愛の念として五百羅漢と称していることに佳代子は気づかされた。

ちょうど一年前のことだ。意思疎通の図りにくい患者を相手にすることでストレスがたまり、患者の扱いが粗暴になっていた時に宮崎看護主任の叱責を受け、パソコンにやつあたりをしながら目的もなく検索をしていた時に偶然デスプレイに映った長安寺の羅漢像を目にした。鮮やかに映える新緑の中の石仏の表情が佳代子の心をゆさぶり、足を向けさせたのだった。

「美由紀、あんたの仕事に疲れているでしょ」

佳代子は一年前の自分の姿を思い出しながら静かに美由紀に話しかけた。

「そうなの。横浜では色んな患者さんがいて忙しかったけどそれなりに毎日が充実していた・・・」

美由紀は羅漢像を巡るために造られた小径をゆっくりと歩きながら佳代子の問いに応えた。

「今の仕事はどうなの？」

「私が担当する患者さんの人数は前よりも増えたけれどケアする内容は皆同じ。看護技術の範囲も狭く、私のスキルが劣化してゆくような気がして」

美由紀は苔がむした羅漢像の前で足を止め、話を続けた。

「大岳には外来もなく、先端医療の必要もない。先生たちだつて落ちこぼれの年配医師ばかり」

「美由紀、それは先生たちに失礼よ。先生たちだつて大岳に何かを見出そうと思つている先生や使命感をもって患者さんに接している先生だつているわよ」

「そうかもしれないけれど……。姥捨て山のお金集めの片棒……」

美由紀は否定しなかった。少なくともぎらぎらと

目を輝かせ、充実をした日々を忙しく送っている先生などこの大岳にはいない。廊下を歩く先生の靴音にそれがにじみ出ていると続けたかったが言葉を呑み込んだ。そして、目の前の石仏と目線を合わせるかのように膝を折った。今、目の前にしている羅漢像は両手を大きく広げ今にも天に昇っていくかのように見える。美由紀は手を合わせ静かに目を閉じた。

「美由紀、大けがをした患者さんや、難病に苦しむ患者さんと何も変わらないわよ大岳の患者さんも」

佳代子も美由紀に並んで手を合わせ、少し間をおいて口にした。

「私にはそうは思えない。どこの病院も患者の完治を目指してスタッフは治療にあたっているのよ。患者自身だつて……」

美由紀は、医師も看護師も患者が抱える病気や怪我を完治させることを目指してスキルを積んでいくと続けたかったが口こもった。

「そうね、大岳病院から患者さんが出てゆくときはその人生を全うしたときよね」

「元氣になつて自分の足で歩き、ううん、車いすだっていい。希望に満ちた笑顔で明日を迎えることができる。そんな患者なんて皆無。大病を併発して他の病院に救急車で運ばれる以外はみんなここで最期を迎えるのよ」

「そうかもしれないけれど、私たちが相手をしている患者さんは生きています。それも七十年、八十年、九十年と生き抜いてきた人たちよ。長い人生の中には色んなことがあつたと思うし。今だつて患者さんに認識はなくてもご家族を含めて色んな事情を抱えながら生きているのよ」

「佳代子、佳代子つてお坊さん？」

美由紀と佳代子は同じ歳である。二十八歳の若さですとりを開いたかのような物言いに敬意を示す意味合いを込めてお坊さんと美由紀が口にした。

「美由紀も私も救急医療をかかえる総合病院が看護師としてのスタートよね」

「新米看護師が先輩に怒られながらあらゆる患者さんを相手に・・・」

充実した毎日だったと続けたかったが美由紀はそれを呑み込んだ。

「前の病院では、毎日が新しい経験の中で医療の最先端を先生たちは担っていた。私はそのお手伝いをしている。看護師になつてよかった。そう思えた」

佳代子が看護師になりたての頃を思い出しながら口にした。

「私だつてそう思ったわ。でもね、仕事に慣れてくるとただ忙しいだけ。看護師不足のしわ寄せで休日もままならない。夜勤も多くなる。彼氏とのデートもままならない。疲れちゃつたのよね。だからつて看護師の職業は捨てられない。ここなら急患もなく長期療養専門だから時間に追われることなく淡々と

仕事をこなしてゆけばいい。デートの約束をドタキヤンすることもない・・・」

美由紀は再び足を止め膝をおると、頬杖をつきながら涙をこらえているかのような石仏に手を合わせた。

「私も美由紀と同じようなものよ」

佳代子も美由紀につづいて膝をおった。

「ねえ、佳代子は彼氏のことって口にしないね」

佳代子は美由紀が同じチームに配属されてすぐに打ち解けあった。歳が同じで総合病院経験者であったからかもしれない。美由紀はことあるごとに別れた彼氏のことを口にした。佳代子は常に聞き役にまわっていた。

「私にだって恋愛の経験はあるよ」

「ふったの？ ふられたの？」

「どっちでもないわ」

「どっちでもって・・・」

「死んじゃったの交通事故で。私が看護学校を卒業したのと同時くらいに」

「じゃあもう八年も前じゃない。まだひきずつているの、その彼を？」

「ううん、思い出としましてしまいこんだわ。今は新しい恋をと思っているわ」

佳代子はそう口にしながら二年前に七回忌を迎えた彼の父親から言われたことを思い出していた。

「佳代子さん。もうじゅうぶんです。息子のことは忘れて君は君の新しい人生を送ってください。佳代子さんが幸せになることを息子も願っているはずですよ」

さらに父親は「もうこの家にも墓にも来ないほうがいい」と続けた。この一言が、六年もの間ひきづってきた思いを断ち切らせた。このことを境に佳代子は、一人の独身女性としてやりなおすことを心に決めたのだった。

「佳代子、ひよっとして彼氏ができたの？」

「違うわよ、彼氏がいたら休日にも美由紀とお寺さんなんかにはこないわよ」

美由紀は佳代子の問いかけを否定しながら木立に透けて見える庫裏に視線を投げかけた。

「それもそうよね」

「それより美由紀、迷いは消えた？」

「迷いつて」

「何言つてんのよ。あんた今の病院やめようかと悩んでいたんでしょ」

「そのことならもういいの」

長安寺を訪れる前までの美由紀は、大岳病院が担っている役割に大きな疑問を感じていた。そしてその中に身を投じている自分に嫌気がさしていた。黒ずんだもやのような淀みの中での看護師という仕事に美由紀は見切りをつけたかった。しかし、そのもやが幾つもの石仏によって晴れかかっていた。

「そう」

「でも不思議なお寺ね。羅漢さんを見ていたら、もう少し今のままでいいかって思えるのよね」

「羅漢さんに逢えてよかったでしょ」

「うん、ありがとう佳代子。でもね、いつかはわからないけれどもう一度、総合病院に移る」

どこの病院の患者も、今ある命と戦っていることに変わりはない。それでも決定的に違っているのは大岳病院の患者のだれもが最期の時を待っていることである。生への望みを放棄しているわけではないのかもしれない。それどころか露木育代は、嫁にぬかづけを教えることで生への執着を見せ、安田トヨコの十六年の記録は執着そのものなのかもしれないと美由紀は思い始めていた。

「そう。いいんじゃないの、いそれで」

目を閉じてはいるが優しく微笑む石仏。頬のこけた顎に手をやりながら何か言いたげな石仏。美由紀が膝を折って手を合わせる頻度がなぜか多くなった。その都度、佳代子も美由紀に合わせて石仏に哀願の念を込めて合掌した。

「ねえ、美由紀。もう気づいているでしょうけど、美由紀が手を合わせている羅漢さん。どことなく担当している患者さんに似ているでしょ」

「そうなのよ、なぜか自然に手を合わせてしまうのよね。ほら、三二四号室の伊藤泰造さんがいるわ。隣には三〇六号室の・・・」

美由紀が、楓の木陰に佇む石仏を指さし微笑んだ。何世紀にもわたる月日が石仏の表情にさらなる味わいを増幅させる。人間が刻む以上の丸みを風雨が削り、石の肌さわりを変える。染みにも似た色合いを醸し出し、苔をまとうことでより深い味わいを漂わす。多くの石仏と担当する患者とが重なる。どの患者も見方を変えれば羅漢なのだ。遠い先を見つめながら幾多の表情を見せる石仏。患者がつぶやく意味不明の声は念仏なのかもしれない。笑う仏。遠くに視線を投げる仏。大きく手を広げる仏。額にしわを寄せる仏。天を仰ぐ仏などひとつとして同じ表情

の仏はいない。大岳病院の病床に横たわる患者たちもこれらの仏に化身する日を静かに待っているのかもしれないと美由紀には思えた。

「やっぱり佳代子さんだ。お帰りになるときには寄つてね。お連れのかたもご一緒に」

「お庫裏さま」

のりこう配の下から声を掛けてきた老夫人に佳代子は顔をほころばせながら丁寧にお辞儀をし、「はい、ありがとうございます」と続けた。

「知っている人？ くりって名前のひと？」

だれなのかと不思議に思った美由紀は佳代子の次の言葉を待った。

「このお寺の奥さま。ご住職の奥様のことをお庫裏さまって呼ぶのよ」

「へえ、そうなの。佳代子って不思議ね。お寺に詳しいのね」

「そんなことはないわよ。私だってここに来て初めて知ったのよ」

「ふうん。ねえ、佳代子はどうかやってこのお寺を知ったの？」

「私も美由紀といっしょよ」

「いっしょって？」

「一年くらい前にね、ネットを見ていて偶然見つけたの」

「それのどこが私といっしょなのよ」

「私も今の仕事に疑問を抱いて、京都にでも出かけてみようかなって……。お寺を検索していたら偶然、箱根の長安寺のホームページを開くことに。そこにたぐさんの羅漢さまを見て……。」

「ねえ、まだ上の方にも幾つもの羅漢様が木陰から……。」

佳代子にも美由紀と同じ思いを抱いた過去があった。治癒を目的とするわけでもない看護に。物言わぬ羅漢ではあってもその存在は大きく感じられた。

「そうね、まだ全体の半分も見えていないわ」

佳代子と美由紀は曲がりくねった小径を登りながら何度も立ち止まっては石仏に手を合わせた。

「お庫裏さま、佳代子です。おじやまします」

本堂の脇に建てられた庫裏の格子戸を開けて佳代子が少し大きめの声を奥に投げた。

「佳代子さん。どうぞ、奥のお勝手場に入ってきてください」

佳代子の声に負けないくらいの声が土間の奥から返ってきた。佳代子は上り框をよけるように台所へと続く土間の奥へと進んだ。美由紀も後についた。「いらっしやい。お昼食べってね。もうすぐ終わるから」

台所ののれんをくぐると同時に長安寺住職の妻、滝藤真紀子が忙しそうに手を動かしながら二人を台所へと招き入れた。真紀子は一週間後に行われる法要の際にふるまう精進料理の試しつくりをしていた。「お庫裏さま、お手伝いしましょうか？」

佳代子は美由紀を真紀子に紹介すると勝手場の手伝いを申し出た。

「ありがとう。でも、もう終わりだから。それより試食をしていってちょうだい。少し造り過ぎたようだし」

庫裏に設けられたお勝手場は時代劇にでも出てきそうな広さのなかに釜戸が設けられ法要が営まれるごとに薪で米が炊かれていた。さすがに米以外の煮炊きはガスが使われるものの一度に多くの料理を調理できるように幾つもの五徳が横一列に並んだ特別あつらえのコンロが据えられ、流しも調理台も手伝いの女たちが手分けして立ち振る舞えるような大きさである。

「佳代子さん。その水屋の前に置いてある箱膳を二つ。お願い」

佳代子は、「はい」と返事をしながら体を返し、勝手場の隅に片づけられている箱膳を二つ抱えて調理

台の上に置いた。続けて、流し場からふきんを取り出しそれを拭き始めた。

「ありがとう」

真紀子が箱膳をと口にする佳代子は躊躇することなく調理台の上に運び、ふきんでほこりを拭き取る。美由紀には二人の動きが阿吽の呼吸のごとくかに映った。もつとも美由紀には箱膳と言われても何のことだかわからない。ふきんの置き場も知らないや、知っていても体がすぐに反応するとは思えなかった。美由紀は佳代子の動きに感心した。同時に、佳代子は何度も、この庫裏を訪れているに違いないと直感した。

真紀子は、箱膳の上に数々の精進料理を皿に盛りつけ並べた。

「美由紀どう。どれもおいしそうでしょ。見た目だけじゃあないのよ、味だって。お庫裏さまの精進料理は料亭さながらよ。」

「佳代子さん、ほめすぎよ」

「そんなことありません。特に、このごま豆腐。絶品です。それにこの筍の煮つけだって。どれも本当においしいと思います」

佳代子は函前の上の料理をひとつひとつ美由紀に解説するかのようには言葉を続けた。

「美由紀この筍はね、裏の竹林から去年収穫したものを塩漬けにした保存食なのよ。それを塩ぬきして煮つけたものなの。それとこの蒲焼はね、ウナギじゃないのよ」

「えっ、そうなの？」

「精進料理だからお魚もお肉も使わないの。これはねお豆腐と山芋で作ってあるの。ウナギの皮は海苔なのよ。よく似せてあるでしょ」

佳代子さん、もうそのくらいでいいわよ。お料理はおいしければいいの。冷めないうちに早く箸をつけてくださいな」

佳代子は真紀子に促されて箱膳を持ち、勝手場の

上り框から台所の脇に設けられた三畳ほどの居間

へと運んだ。美由紀も佳代子にならない箱膳を運んだ。

滝藤家の普段の食事は、土間の勝手場ではなくどこかの家庭にもあるこの台所で作られ、中央のテーブルで食されていた。脇の小さな居間は、くつろぎ場としてその役目を果たしていた。

「おいしい」

美由紀が膳に箸をつけて感嘆の声を上げた。

「そう、よかったわ」

真紀子が嬉しそうに微笑むと、「何膳でもお替わりしてくださいね」と、続けた。

「お庫裏さま、ごちそうさまでした」

美由紀には初めての精進料理だった。口に運ぶごとに広がる満足感と何とも言えない旨味だった。これらが自然に美由紀の口からお庫裏さまと言わせたのかもしれない。

「お片付け、私にも手伝わせてください」

「いいの、いいの。そんな気は使わないで。それに
もうすぐ主人と耕宗が帰ってくるから。そうすれば
また洗い物が」

真紀子は佳代子の申し出をやんわりとかわした。

「そんなことより、佳代子さん。今からどこかへお
出かけ」

「今日のドライブは佳代子に羅漢さんを観てもら
って、あとはガラスの森にでもと・・・」

「そうなの。でも、もう少しいいでしょ。今、お茶
を点てるから本堂で待ってて。耕宗ももうすぐ・・・」

「ありがとうございます。このあとの予定なんて、
ぜんぜんありませんから」

間髪を入れず美由紀が応えた。佳代子と耕宗との
間に何かがある。その何かを知るにはもう少しこの
長安寺で時を過ごす必要があると女の直感が言わせ
た。

「美由紀」

佳代子はたしなめるように眉間に小じわをよせ、
美由紀に視線を投げた。

「まあいいじゃないの佳代子さん。美由紀さん、私
が点てるお茶もなかなかのものよ」

真紀子が笑いながら佳代子と美由紀を本堂の方へ
と追い出すかのような仕草で台所から席を立たせ
た。

「佳代子、あなた私に何か隠しているでしょ？ 正

直に白状なさい」

「なんのこと？」

本堂へと向かいながら、美由紀が佳代子の背中に
投げた。佳代子は悟られまいとしていたことに美由
紀が気づき、観念するしかなかった。が、恥じらい
が否定の言葉に変えた。

「とぼけないで。耕宗さんって佳代子のいい人なん
でしょ」

「そんなんじゃないわよ。お友達よ。お友達。長安寺の副住職さん」

「なにをそんなに慌てて否定しているのよ。そうよって言っているのも同じじゃない。ちゃんと紹介してよね」

「わかったわよ」

佳代子と耕宗との出会いは、偶然知った五百羅漢を観てみたいと長安寺を訪ねた時だった。数多くの石仏にしゃがみ込んで手を合わせる佳代子に耕宗が声を掛けてきた。黒い僧衣をまとった耕宗は僧侶として佳代子に声を掛けたのだった。

「どの羅漢さまも手を合わせる人にやさしく語りかけてくれます。だからと言って悩みを解決してくれるわけではありません。答えを教えてくださいるわけでもありません。でも何かを気づかせてくれます」

佳代子は耕宗の静かな語りかけに安らぎを感じたことを今でも覚えている。まるで目の前の石仏が佳

代子の心の内を読み取り、耕宗の口を通じて癒してくれようとしているかのようだったことを。

「よろしければ、お帰りに本堂にお寄りください。

もらい物ですが美味しい羊羹がありますのでお茶を飲んでいってください」

「はい、ありがとうございます」

幾つもの石仏に手を合わせ、佳代子は本堂に立ち寄った。

「よくお参りいただきました。羅漢像とお話はできましたか？」

耕宗が優しく微笑みながらお茶を点てた。茶の湯の作法を知らない佳代子は、戸惑いながらも耕宗が差し出した茶碗を口に運んだ。口の中に広がる抹茶の苦みがなぜか佳代子の心を軽くした。安らぎを覚えた佳代子は仕事に行き詰っていることを耕宗に話した。特に耕宗は僧侶として何かを佳代子に諭すでもなく仏の道を説くでもなく微笑みながら優しく聞

き役にまわってくれていた。それ以来、佳代子は月に一度は長安寺の本堂でお茶を飲むようになった。

「いらっしやい」

本堂には庫裏へとつながる廊下が設けられている。耕宗の足運びは僧侶らしく静かなものではあったが心なしか顔には笑みがこぼれていた。明らかに佳代子の訪問を歓迎している笑みだった。それも僧侶としてではなく一人の男としてのものだった。

「おじやましています」

佳代子が耕宗に笑みを返すのと同時に美由紀は佳代子に合図の視線を送った。

「耕宗さん、同じ病院の看護師をしている橋本美由紀さん。羅漢さんに逢わせてあげようと思って。今日いっしょに」

「橋本美由紀です。今日はお庫裏さまにお昼をごちそうになりました」

「そうですか。どうでした、精進料理は？」

「はい。初めての経験でしたがとてもおいしくいただきました」

「よかった、作り甲斐があったわ。二人ともご飯のおかわりまで・・・。美由紀さんは三度も」

真紀子がポットと茶の湯の道具を持って本堂にやってきた。

「やだ、お庫裏さま」

美由紀の顔が赤らんだ。

帰りの道中、美由紀の表情は朝のそれとは大きく変わっていた。幾多の石仏に手を合わせたことで悩みが多くが消え、初めて口にした精進料理が美由紀を前向きにした。

「ねえ、佳代子。来年の今頃はお庫裏さまではなくお義母さまって呼んでいるんじゃないの？ どう見ても秒読みって感じだったわよ。あなたたち」

「・・・」

「正直に言いなさいよ。耕宗さんが本堂に入ってきたときの二人の顔。もう、他人じゃないよって顔してたわよ」

「かなわないわね、美由紀にわ」

「佳代子。私、もう少し大岳で頑張る。今やめたら逃げ出したって言われちゃうから」

「だれもそんなこと言わないわよ。逃げ出したと思うのは美由紀自身の心が美由紀自身に思わしてるのよ」

「そうかもしれないけれど……。いずれは総合病院で自分のスキルをもう一度、磨きなおしたいと思う。でも、今じゃない。そう思えるの」

「美由紀の思う通りになさい。美由紀の人生だもの」

「うん。それにしても佳代子、お坊さんみたい」

「やだ、そんなことないわよ」

「ううん、耕宗さんの影響大ってところね」

佳代子の言葉を否定しながら美由紀は微笑んだ。

「佳代子。大岳病院の今の状況ってどう思う？」

「どうって？」

「大岳の患者は行き場のない患者ばかりよね」

「そうね。自宅介護の難しい患者や介護そのものをする人がいない生活保護者ね」

「そしてだれも元気になって退院する患者はいない。それって病院って言うの？」

「難しい話ね。私にはよくはわからない。でも目の前に患者さんがいる。私は看護師。それだけでいいような気がする」

「昔なら家族が看護をして患者は最期を迎える。そこにはなんら近代的な医療も延命もおこなわれることはない。人間の尊厳ってなんだろうって思うの」

「何よ、美由紀の方がお坊さんみたいじゃない」

「だってそうでしょ。ひとはだれでも尊厳によってだれでもが人は人らしく。生きてる時も、死を迎える時も……。ただ命をつなぐただけに栄養剤を

食事といつて患者に与える。それも鼻から直接食道に流し込む。患者が食事をしている感覚などあるはずもない。どうなんだろうってときどき考えてしま
う」

「耕宗さんも同じようなことを言っていたわ。安楽死は絶対に肯定できない。人は命ある限りどのような状態であれ生きるべきだ。だからと言って人工的な延命は図るべきではないって」

「そうよね。で、佳代子はなんて応えたの？」

「昔なら命を落とした怪我や病気が医療の進歩によって生きながらえることができる。奇跡だって起こるかもしれないって」

「そうしたら」

「確かに、医療の進歩によって助かる命が多くなつて喜ぶ人も多くなった。しかしその反面、金もうけに走る商売としての医療も多くなったような気がするって。耕宗さんは言っていた」

「私ね、どんな形でも生きていてほしいって思うのは親族としてのエゴじゃないかって。患者自身は本当に生きたいと思っているのだからって思うことが・・・」

「わからないわけじゃないけれど看護師が立ち入る領域じゃない気がする」

「そうなのよね。なんか今まで私は患者さんを見る前に違うものを見ていた気がする。私は看護師。まずは患者さんを見るのが私の仕事よね」

その後、二人は押し黙った。

「トヨコさん。おはようございます。窓の外に桜がきれいに咲いてますよ」

「トヨコさん、元気になったら一緒にお花見しましょうね。いっぱいのお弁当もって」

翌日、佳代子と美由紀は安田トヨコの栄養パックをスタンドに掛けながら優しく話しかけた。相変わ

らずトヨコは何の反応も示さない。十六年前から毎日続けられた患者への朝の語りかけである。

「おはようございます」

二人の明るい言葉が次の病室の入り口にはもった。

了